

《講演》

「経済学的子育て論」

中島隆信（慶應義塾大学商学部教授）

子どもは、私的な「財」か、 公的な「財」か

今日は「経済学的子育て論」ということで、お話しいたします。経済学といえば、多くの人たちは世の中のことをお金で解決する、という発想が非常に強いと思われる。実際、経済学の純粹の理論では、市場メカニズムを使って、世の中がこうすれば資源が最適に配分されるといった話をするのですが、世の中の大抵のことは、経済学が想定しているようにはうまくいきません。

さて、まず子育てとは何かということですが、私的な財なのか、公的な財なのかというところがあるかと思えます。

かつて日本では「産めよ殖やせよ」、子どもを増やすことが国の発展につながる要素であるということが言われましたし、義務教育も、子どもは公的なものだという発想が根底にあると思われる。

しかし、経済が豊かになってくると、子どもは社会のものというよりも、私的なものだという考え方が強くなってきます。さらに、家業が減り、父親が自宅から離れた会社で働くことが多くなった現代では、子どもには普段、父親がどこで何をして働いているかが見えない。つまり、仕事と生活の間に距離が生まれてきます。すると、子どもは自分の世界ができてきて、家族の個人化が進展していく。そして、個々の家庭が、それぞれに子育てをしていますから、社会に貢献しようといった意識もだんだん薄れてきます。

今、日本は少子化で出生率が1.4ぐらいになっています。現在の日本の総人口は1億2,000万人ほどですけれども、2060年には8,000万人ぐらいになって、2100年には6,000万人ぐらいになります。「自分は子どもを産む気はないし、将来、子どもの世話になる気もない。自分の面倒を見てもらうにはお金があるので、貯金はしている」「子どもを産むか産まないか、育てるか育てないかは自由でしょう」という風潮がさらに強くなっていけば国が成り立たなくなります。それを経済学では「合成の誤謬」と言います。

子どもを産む気はないし、面倒を見てもらおうとも思っていない、と考えるのは自由ですが、動けなくなったら必ず誰かの世話になるのです。つまり、自分の子どもがいなければ、他人の子どものお世話になるとい

うことになるわけです。これがフリーライダーです。すでに今、そのような状態になってきているのではないかなというのが私の印象です。

子育ては「消費」か、 「投資」か

次は、子育ては「消費」なのか、「投資」なのかを考えてみましょう。

その場限りで終わるもの、その場で快樂を得るものを、経済学では「消費」と呼んでいます。一方、「投資」というのは、そのときは我慢するけれども将来必ず大きな見返りが来るものをいいます。つまり、将来の収益の期待です。

例えば病院に行くのは、この定義でいくと投資になるわけです。薬を飲んだり、手術をしたりするのは、将来、健康を得られるために、今、我慢しているわけですね。しかし、教育はどうでしょう。多分、大人や社会は、子育ては投資だと思っているでしょう。つまり、子育てや子どもの教育のために時間や資源を使っても、その見返りが将来やってくると考えている。ところが、今を犠牲にして、となると、行き過ぎが起きるわけです。

高圧的に、あるいは強権的に子どもに勉強させても、絶対、将来プラスになるかということ、わからない。だけど、教育イコール投資だということになると、全部が正当化される可能性があるわけです。かつて体罰がよしと言われた時代がありました。言わなかったら体で覚えさせる、痛いと思うことが、その子の将来のためになる、成長につながるといった理屈でしたが、それは投資だから、ということで正当化されたわけです。

さらに、この問題が難しいのは、子ども自身は投資という発想がないということです。おとなしく座って先生の話聞くのと、外で遊ぶのと、どちらが楽しいかといえば、外で遊んだほうが楽しいわけで、外で遊ぶことを犠牲にして、なぜここで座っていなければならないのかといえば、投資だから。投資だとわかっている人は、座る。しかし、幼い子どもには、どうやってわからせたらいいでしょう。投資なんだと言って説明しますか？「今、我慢すれば、将来、いいことがあるんだ」と。そんな話は子どもにはわからないと私は

思います。

はっきり言って、子どもが教室でおとなしく40分とか50分も座っているのは奇跡です。では、子どもたちを座らせるためにはどうしたらいいかというと、楽しくしなきゃダメなわけです。つまり、消費的な要素が必要になるわけです。だから私も、教室でつまらない冗談などもあえて言うわけです。楽しませないと、みんな教室から出ていっちゃう。外よりも教室にいる方が楽しいと思わせなきゃいけないので日々、苦労しています(笑)。

「利己主義」的動機と 「利他主義」的動機

もう1つの子育ての重要な要素は、利己主義と利他主義です。これは教育をどう思っているかということです。つまり、動機です。

一般的に、経済活動の動機は、お金です。Aという選択肢とBという選択肢があって、他の事情は一定だが、Bの方が報酬がよいとなったら、必ず人はBを選ぶ。つまり、動機づけは金銭的なインセンティブによってなされます。動機は、コストが高いか低いか、あるいは報酬が多いか少ないかなのです。

ところが、教育は報酬がほぼ一緒です。つまり、成果が見えにくいので、インセンティブがつけづらいのです。学校の先生にどういうインセンティブをつけますか。民間の企業なら、売り上げが上がれば高い報酬を出すと言って動機づけができますが、教育では難しい。テストの成績でインセンティブをつけたら、子どもたちにテストでいい点を取れるようなことばかり教えるとか、妙なことが起こりそうです。

では、教育の動機は何なのか。経済学では、利己主義的動機か利他主義的動機のどちらかだと考えます。まずは、自分のため、自分が快感を得るために教育しているという「利己主義」的動機です。他の人に何を言われようと自分の教育的信念に基づいて行動する場合はそれに当たります。一方、「利他主義」的動機は、相手に喜んでもらえることを一番の動機として考えます。例えば、授業が終わった後、「今日の授業、すごくよかった」と学生が言いに来てくれたり、おもしろいことを言ったときに、わっと笑ってくれたりすると、嬉しい。すると、またそう言ってもらえるように頑張るとか、今度はもっと笑いをとるぞ、と。そういうものが利他主義的動機に当たります。

先生の場合はそういうことになりませんが、親の場合も利己主義的動機が結構強いと思われます。つまり、子どもを育てたことによって何か見返りが得られる。例えば、子どもがいい成績を取ったとか、いい学校に

進学したので嬉しいとか、人にそれを言ったら、「すごいわね」とか言われて嬉しかったとか……これらもすべて利己主義的動機です。ですから、100人ちょっとの定員の有名私立小学校の受験には千何百人もの子どもが押し寄せます。

もう一つ例をあげます。例えば、出生前診断は利己的、利他的、どちらでしょう。仮に、障害をもって生まれてくる可能性が高いということがわかったときに、この子が生まれたらきっと苦勞するからと考えて中絶するというのは、利他主義と言えますか。

利他主義というのは、相手が喜ぶのを見て自分も嬉しくなる、相手が悲しんでいると自分も悲しい、というのが利他主義です。とすると、生まれてきたいかどうかを自分で判断できない胎児のことを考えて、というのは利他主義ではない。利己主義的動機でしかありません。善悪について言っているのではありません。分析しているだけです。

『母よ！殺すな』という本をご存じでしょうか。私が『障害者の経済学』という本を書いたときに知った本で、脳性麻痺の人たちが勉強会を開いたり、運動を起こしたりして、できたといわれています。

日本では、障害をもつ子どもの母親が、自分が死んだ後の子どものことを悲観して親子心中するという事件がよく起きていますが、子どもだけが死んで、親が生き残るケースが多いのです。それで、裁判になるのですが、大変な思いをして子どもと向き合って暮らして、苦勞して、悩んだ末にやむなく子どもに手をかけてしまったお母さんの減刑嘆願運動みたいなものが起きたりする。それに対して「それは利他主義的なのですか」と問うている本なのです。子どもは親の死後のことなど考えていないのに、母親が勝手に思い詰めて殺している、だから、『母よ！殺すな』と。

また、私は「心配」というものも利己主義的なものだと思っています。例えば、私のゼミでは中国に学生を研修に行かせているのですが、学生が興味を示しても、いざ行くとなると親が「危ないからやめなさい」と反対して、直前になってキャンセルする学生が結構いるんです。

心配とは、利己主義的動機を利他主義的に見せる魔術のような働きをする、というのが私の定義です。心配だと言われると、子どもは親に対して非常に悪いことをしているような印象をもつ。つまり、親は「あなたのことが心配なのよ」と言えば、子どもは思いとどまるだろうと思っているわけです。情報を与えて、なぜ自分が心配に思っているかというエビデンスを提示して、あとは子どもに判断させるということであれば、利他主義的と言えるかもしれませんが、単に「心配だ」と言うだけでは利己主義ではないかと。

また、「愛」という言葉も、とてもわかりにくい言葉で、すべての価値観を超越しているという感じがしています。『お寺の経済学』という本を書いたときに知ったのですが、仏教で大事なものは「慈悲」であって、「愛」ではダメだということです。愛というのは利己主義的になりがちで、愛を誓うといったときに、それが利他主義的なのか、利己主義的なのか、わかりにくいと言うのです。

例えば、男性が夜景のきれいなレストランで食事しようと女性を誘います。そこで、「夜景がきれいで嬉しかった」「今日はおいしかった、ありがとう」と言ってもらえて、良かったと思うこと、これは利他主義です。けれど、男性が「自分はこんなきれいな彼女を連れてくるんだぜ」と、自分がいい思いをしたいと考えていたとしたらこれは利己主義です。けれど、周りから見ると、単に「あの2人は愛しあってるね」という印象です。だから、わかりにくいんです。

そういうことは、子育てにもあると思います。よく子どもを怒鳴りつけている母親がいますが、利他主義、利己主義、どちらの動機なのかな、と。怒鳴ったことによって子どもが成長するともあまり思えないですし、暴言とか罵倒とか体罰とか、そういうものは大体、利己主義的なものが多いだろうという印象です。

では、子育ては何を目指すべきなのでしょう。僕は子どもの自立ではないかと思っています。企業なども同じですが、閉鎖的な組織は自己都合でいろいろなルールをつくり、自分たちがやっていることをだんだん正当化していきます。

そうならないようにするには、例えば企業でいうなら、常に市場経済を意識するということが重要になります。今、やっていることを、お客様は本当に喜ぶだろうか、という考え方です。例えば食品を作る機械の器具を掃除しなければいけない作業を「めんどくさい」と思って手抜きをすると、食中毒を起こしてしまいます。常に市場経済、お客様を意識して、お客様のために、お客様がどう思うかということを考えながら行動するというのが企業にとっては一番大事です。今、三菱自動車の不正が問題になっていますが、これも大切なことを忘れていた結果、しっぺ返しが来ています。

子育ても同じで、家庭という閉鎖的な空間で「これが、うちの子育てです」と正当化していけば、しつけのつもりだった行為もエスカレートしていきます。実際、ひどい虐待も起きています。子育てというのは、常に子どもが自立できるように、つまり子どもが社会に出ていったときに、ちゃんと生きていける人間になるということを考えていくことが重要なんじゃないかと思っています。

子どもの教育とは何か？

次に、子どもの教育とは何かということを考えてみたいと思います。先ほども言いましたように、教育というのはなかなか先が見えない、不確実性が高い活動なので、どうしても転ばぬ先の杖的になりがちです。要するに、今のうちにこのような準備をしておけば、将来、道を外さないだろう、将来困らないだろう、という感じです。しかし、それでも道を踏みはずす人がいます。また、転ばぬ先の「杖」の使い方がわからない人がたくさんいると感じています。

教育というのは自分が困ったときに、その杖を作り直したり、別の杖を手に入れたりするためがあると私は思います。あるいは道はずれても、またそこに戻れるように、教育というのは用意されていなければならない。しかし、日本の場合、なかなかそのような考え方を教育には求めていないようです。もちろん、制度的には社会人教育も通信制の教育もあるんですが、そういうものが日本で広まらないというのは、転ばぬ先の杖的な発想が強いからじゃないでしょうか。

『障害者の経済学』という本を書いたときに考えたのですが、福祉もそういう発想が日本では強い。事前にいろいろな制度を準備してあげるわけです。特別支援学校などはその典型です。障害者も法定雇用率が2%になりますから、企業も障害者を雇いたい。そこで特別支援学校を出た後、企業に就労する。ルールからはずれないやり方です。けれど、例えば20歳を過ぎてから精神障害を発症したとか、発達障害なのに親が無関心でほったらかしたまま20歳を過ぎた人は福祉サービスを受けていないのでルールに乗っかっていない。そういう人たちへの対応が、日本はできていません。

『高校野球の本』を書いている時には、高校野球は教育なのかどうなのかと考えました。高野連は、高校野球は教育だとうたっています。なぜなら、教育だと言った途端に、教育の枠組みに入って守られるからです。例えば野球をやるには広い場所が必要で、周囲にはネットを張るなどすごくコストがかかるのですが、「教育」であれば正当化されます。

しかし、例えば、あの真夏の炎天下で野球をやっているのは教育でしょうか。あれは教育というより文化ですね。真夏に、汗と涙と泥で真っ黒になってやっているから、みんな「おお、頑張っているな」と喜ぶ。それが日本の文化です。そして、それも教育の一環だと言うことによって、炎天下の試合が正当化されているわけです。

高校野球では、優勝するのは全国4,000校ぐらいの中のとった1校だけ。つまり、残りの三千何百校は全

部負けるんです。物は言いようで、負けることから人間は学ぶのだと。失敗することから人間は成長するのだと。レギュラーになれなくても練習や試合を見ているだけの自分も負けないで頑張ろうと思う、それが教育なのだ。そういう要素を維持しなきゃいけないということがあって、教育という看板を外せないんじゃないかなと僕は思っています。教育によっていろいろな批判をかわせるのです。

大学駅伝、あれも教育でしょうか。陸上部には大学の予算の一部がぎ込まれています。大学のお金は、国公立はもとより私学でも助成金がついていますから、駅伝にも税金が使われているわけです。なぜそれが正当化されているかということ、教育という大義名分があるからです。日本中の人が、必死になって走っている姿を見て感動する。走っている本人も、これだけ頑張ったのだということが後につながる。だから、投資的な発想ですね。本当は、何につながるかなんてわからないんだけど。

さて、次はビデオをご覧ください。私、子どもが2人いるんですけども、上の子どもが脳性麻痺の障害者で、もう30歳になっているんですが、その子が通っていた中学の特別支援学校の運動会の様子をビデオに撮ったものです。

(ビデオ再生)

運動会の最後に行われるリレーです。これはアンカーの生徒ですが、なぜ後ろ向きに走っているかというと、この生徒はある程度普通に歩いて、まともに歩くとすぐに一周してしまうので後ろ向きに走らせているんです。

次のビデオの、この子も普通に歩けるので手押し車にして競わせています。足を持っているのは先生です。実は、僕も嬉しがつてこのビデオを撮っていたのですが、『障害者の経済学』という本を書いてしばらくしてからこのビデオを見て、何か変じゃないか気がつきました。

肢体不自由児は体を動かすのが苦手な、あるいは体を動かす部分に障害をもっている子たちで、運動が不得意な子が多いんです。その不得意なことで競わせて、うまくいかないのを見て親や先生たちは喜んで笑ったりしているわけですが、当事者たちは、ずっと突っ伏している子もいれば、ほかの方向を見ている子もいる。では、肢体不自由児の運動会は、何のためにやっている行事なのでしょう。

私はこの現場に親として参加していたので、先生たちは、よく頑張っているなど思っていたのですが、冷静に考えてみると、要するにあれは職員のための活動だった。それを教育ということで正当化している。つ

まり、障害をもっている子たちも運動会をやりたいに違いない。障害のある子たちが、運動会ができないのはかわいそうじゃないかと。この論理はすごく強いので、周りが黙ってしまいます

先生たちは、いろいろな道具を作ったりしてものすごく前から準備しています。車椅子の子が競技に参加できるように、押しボタンでボウリングのボールを転がせるようにしたり。けれど、子どもたちはほとんど寝た状態なので、先生が腕をつかんでボタンを押したりしてやっている。それだけのリソースを使う意義はどこにあるのかというと、それは「運動会を味わわせてあげたい」なんです。だったら、本当に子どもにとってプラスになるようなことにリソースを使ったほうがいいのではないかと思うようになりました。

もう1つ、お話しします。今、特別支援学校は何をミッションにしているかということ、就労支援なんです。東京の場合、永福（都立永福学園）は就労率96%。足立（都立足立特別支援学校）は100%です。となると、永福に入れば就職できる、将来も安泰だということで永福に入るための塾まであるようです。

親がホームページにアップしている資料を見ると、非常出口マークは何のためにあるのかという質問をしたとか、作文を書かせるので準備しなさいとか、計算問題などもありますよとか。そして最後に、面接のときは「元気で挨拶して、他の生徒と差をつけましょう」と書いてあります。なぜかということ、企業が特別支援学校の卒業生の採用を決めるときには、まず挨拶をみるわけです。

特例子会社などに見学に行くと、働いている子たちが、みんな作業をやめて立ち上がって「おはようございます」と挨拶します。企業の方は「障害者の子たちは大きな声で挨拶するから、働いていて気持ちいい」とか言うんですが、だったら他の人たちも挨拶すればいいんです。特例子会社の障害者だけが挨拶を要求される。

要するに、特別支援学校は、企業に入れそうな子を選抜して入学させているんです。だから、就職率が100%なのは当たり前。しかし、それが教育でしょうか。

障害者の教育に関していろいろ議論されていることは、すべて一般の社会に共通します。教育とは何なのかということ議論するときに、いろいろな学校が例に出されますが、まず特別支援学校を考えてみたらどうでしょうか。

まとめです。

- ①子どもは、社会資本である。
- ②子育て（教育）は、社会資本への投資であるが、当事者の多くはそれがわかっていない。

- ③子ども本人とその関係者（親・教育者など）に正しいインセンティブを与える
 ④子育てが目指すところは、子どもの自立

私は教育については素人です。ただ、経済学的な発想から見ると、ここまで述べてきたようなおかしなところが見えてきます。そのおかしなところを教育の専門家の方たちはどう見ているのかなというところに非常に興味がありますし、また、経済学をやっている人間として、何か貢献できればいいかなと思ってもいます。

最後に、教育の基本はこれしかないと思って、いつも引用しているんですが、福沢諭吉の『学問のすゝめ』の一節を紹介します。

「西洋の諺に『愚民の上に苛き政府あり』とはこのことなり。こは政府の苛きにあらず、愚民のみずから招く災なり。愚民の上に苛き政府あれば、良民の上には良き政府あるの理なり」

つまり、国民が勉強しないでいると、政府が好き勝手やるよ、と言っているのです。今こそ、この文章を我々は嘸みしめるべきじゃないでしょうか。ということで、終わりにさせていただきます。ありがとうございました。

（第7回「子ども学カフェ」講演会より／

2016年4月23日／慶應義塾大学三田キャンパス）

〈プロフィール〉

中島隆信（なかじま・たかのぶ）

1960年神奈川県横須賀市生まれ。83年慶應義塾大学経済学部卒。88年同大学院経済学研究科博士課程単位取得退学。同大学商学部助手、助教授を経て2001年より同大学商学部教授。商学博士。93年から95年まで訪問研究員としてイェール大学経済成長センターに滞在。2007年から09年まで内閣府大臣官房統計委員会担当室長を務める。また、財務省、経済産業省、農林水産省などで客員研究官を務める。一見すると経済学とは縁遠い分野を経済学的視点から分析する仕事を続けている。著書に『大相撲の経済学』、『お寺の経済学』、『オバサンの経済学』、『高校野球の経済学』（ともに東洋経済新報社）などがある。01年には『日本経済の生産性分析』（日本経済新聞出版社）にて慶應義塾賞、06年には『障害者の経済学』（東洋経済新報社）にて日経経済図書文化賞を受賞。